

文化高知

'97年3月 NO.76



オケアノキ
一九九七年
雲の木

「雲の木」 織田信生

蛇頭（スネークヘッド）

林 眞 琴

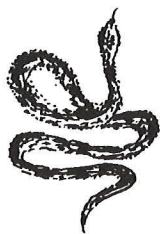
最近、大型漁船等を使った中国人の集団密入国事件が頻発している。特に、今年に入ってから、わずかに二カ月足らずの間に、沖縄で九十三人、伊豆諸島付近で三十八人、犬吠

崎沖で四十六人、三重県沖で五十九人と集団密航が相次ぎ、ここ高知においても、一月には須崎沖で十二人、二月には足摺岬沖で九十四人の中国人密入国者が検挙された。まさに空前の密航ラッシュである。政府も、こうした事態に業を煮やし、二月十三日、中国に対し、不法出国の取締りの強化を申し入れた。このように密入国事件が急増している要因を正確に把握することは困難であるが、中国における改革・開放路線の推進もその一因として挙げられると思う。開放政策は、確かに中国国民の生活レベルを押し上げたが、他方で貧富

の差を拡大させるとともに、国民の上昇志向を刺激し、他国での一攫千金を夢見る人々を増やしているのではなかろうか。

◇
ところで、こうした集団密入国事件の多くは、「蛇頭（スネークヘッド）」と呼ばれる国際的密航請負組織によって計画・遂行されている。「蛇頭」という名前は、蛇のように頭をつぶさないと死なないしぶとい組織だからその名がついたという説があるが、はっきりしていない。「蛇頭」には、中国南部の福建省の沿岸都市や香港、台湾等を拠点にするいくつかのグループがあるが、各グループは、①密航者を勧誘して中国から送り出す「勧誘蛇頭」、②密航者を日本まで送り届ける「引率蛇頭」、③日本に先に入国して密航者

を出迎え最終目的地（東京等）まで連れていく「出迎え蛇頭」、④密航料の取立を行う「取立蛇頭」とに分かれ、それぞれが役割を分担しながら密航ビジネスを展開している。密航料の相場は、一人あたり二百五十万～三百万円と高額であり、仮に百人近くの密航者を運べば、一度の航海で三億円近くの収入になるから、極めておいしいビジネスと言える。密航料の支払いは、密入国が成功した後には本国の家族が後払いするケースが多いが、その取立は厳しく、密航者を送り出した中国本土の「勧誘蛇頭」が「取立蛇頭」に変身して執拗に支払いを迫り、最後には家族の家や土地までを取り上げることも珍しくないと言われている。一方、家族の期待を担って出国した密入国者本人は、本国への送金のため、飲食店や建設工事現場等で不法就労に励むことになるわけだが、最近では、我



が国も不景気のため密入国者の職場が少なくなっており、そのため、仕事にあぶれた中国人グループが、パチンコプリペイドカードの偽造などの犯罪に手を染める例が増え、大きな問題となっている。

◇
昔の密航船は、直接日本沿岸に接岸して密航者を上陸させることが多かったが、最近では、密航船の多くがGPSと呼ばれるカーナビと同じ原理で船の現在位置を示す航法装置を装備しているため、これを使って夜間海上に定点を定めて日本側の出迎船と会合し、これに密航者を引き渡すという方法が一般化している。しかし、この手口が使われると水際での検挙はより困難なものとなる。このことは長い海岸線を持つ高知にとっては実に頭の痛い問題である。この原稿を書いている最中にも、新たに室戸岬付近に八十人以上の中国人が船で不法上陸したという情報が飛び込んできた。他方、今日のテレビは鄧小平死去のニュースを伝えているし、今年には香港の中国への返還も予定されている。せめて、中国大陸が混乱して中国からの不法出国者が増大するような事態にならないことを強く祈るものである。

（はやしこと・高知地方）
（検察庁三席検事）

日記考

西山壽万子

日記をつける習慣がある。三日坊主で何をやっても長続きしないのに、この習慣だけは続いている。本稿を書くに当たって振り返れば、足かけ二十と一年がたっていることに、我ながら驚く。

日記と遺伝子の関係は後世の研究に待ちたいが、我が家では母も祖母も日記をつけている。母の女学生時代のそれは「日々の姿」というタイトルで、折しも終戦間近い、文字通り日々の姿が多感な年齢の少女の筆に成っていて、戦時中の家庭・学園双方のドキュメントとして値打ちがある。母はいやがるので、彼女の抗議の届かない日が来たらワープロ打ちでもして親しい人に公開し、一庶民の記録として残しておきたいと密かにもくろんでいる。その必要条件は、母より自分の方が長生きすることであるが。

この人の母、つまり私の祖母も、かなりな量の日記を残している。小

学校しか出てない人が淡々と暮らしを綴っただけのものであるが、時には日記に書くことで鬱屈を晴らしただろう、長い記述もある。祖母の死は悲しくて、その筆をたどることはおばあちゃん子の自分には耐えがたく、今日まで子細に読むに至っていないが、老後の愉しみにと買い込んでいる多くの本のひとつに祖母の日記も数えている。義理の寄せ木のようになら集まった決して幸せといえない家族の記録を出せるものではないだろうが、そこに登場する一人ひとりのドラマは私には大事なものである。

私の日記は、寄せ木の一片だった父の死の直後から始まっている。それまでもぼつぼつ単発的に日記はつけていたのだが、「日記」ではなく「週記」、時には「月記」となるほど不定期で、書きたくなったときワツと書くというカタルシス型のものだ

った。父はアルコール依存症で五十二歳で急逝するのだが、父の死で激しく「人が生きるとは何なのか」を問われ、それが心の中のどうい回路をたどって日記に至ったかおぼえていないが、結果として日記がスタートしていた。多分、生きるという途方もないことを日々の単位に微分することで、考える手助けにしたかったのではないだろうか。この時三年連用日記を使い始めた。この様式の日記帳は使ってみれば評判のおり使用いいし、書く励みにもなる。

一年目については何らメリットはないが、二年目からは、前年の同じ日がどういう日であったか、上段を見れば直ちに分かる仕掛けになっている。それを読んで、人が生きるとは変わらばえしないことの繰り返しだなど感ずることもあれば、子どもが登場する場面などでは一年前に比べてなんと成長か目を見張らされたり、去年までいた人が今年はいなかったりとの転変を知らされたりもする。

寝る前のほんの数分、七行の短い記録で一日を閉める。パプロフの条件反射ではないが、日記といえれば必ずウイスキーが来る。日記書き書きウイスキーをなめることがいつの間にか習慣となってしまう。ウイス

キーの力を借りて一日の緊張をほぐしながら良くも悪くも終わってしまった今日という日を見送る。すでにまぶたは重くなり、眠りへの助走が始まっている。

七行の記録には、昔こいんな感慨を盛っていたが、近年メモ風客観的スタイルに落ち着いた。その方が後で読んでその日の印象が鮮明によみがえるのである。年とともに欄外に欠かせなくなつたのが起床と就寝の時間、生理の周期、朝の体重。健康チェックとしてこれらが意外に役立つ。

日記にまつわるあれこれのおしまいに書き落とせないのがその思わぬ効用についてである。

年とって物忘れが激しくなると、たった一年前の記述でさえ「え、こんなことがあった？」と疑うことがままある。人間とは忘れる生き物なのか、あきれるほど多くのことを忘れていく。

日記の行に確かに存在した自分を、それを忘れ果てた自分が「へえ」とあきれながら読む妙味は捨てがたい。日記こそ自分というたった一人の読者に向けて書かれた最大の読みものであることを知るのである。かくして、今夜も日記を書く。

（にしやますまこ・高知市立）
（海老川市民会館々長）



もほぼ毎日行われ、内容もハードになり、アクシデントも増えました。筋肉痛多数、骨折二人、盲腸一人などなど。最初百二十人ほどいた仲間もこの頃になると八十六人にまで絞られ、自分自身もハードな練習や個人的な理由から練習中倒れそうになったことも度々ありました。しかし、そういった逆境も、劇中歌が一つ出来上がり、振り付けが一つ出来上がり、「絵金」の完成が形として見えてくるにつれ、苦にならなくなっていました。最初は苦手であった練習ももつとやっていたい、皆と過ごす時間ももつと長いほうがいいと思えるようになっていきました。しかし時間は止まってはくれません。

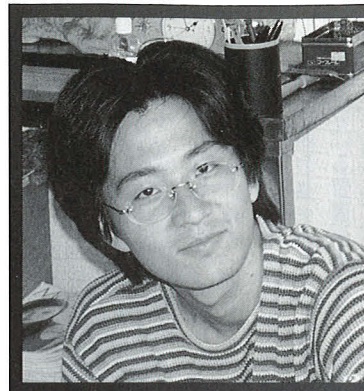
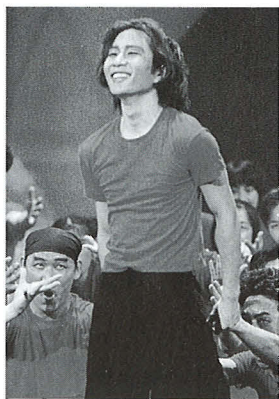
公演本番に向けて、そして終了に向けて分刻みに時が流れていきました。すべてが終わった今、本番前のあの糸が張りつめたような緊張感も、無我夢中で駆け抜けた本番も、フィナーレが終わって鳴り止まない観客の拍手も、忘れることの出来ない思い出として残っています。ビデオの編集や写真の整理に携わり本番のエネルギーに間接的に触れても、あの時のほとばしるエネルギーを感じ、本当にあの舞台に立つことができ、よかったと思います。スタッフを含め百人以上の人間が心血を注いでやっと創り上げた舞台であったと思



最後にりましたが、振り付けの須賀先生、本番で間違っすみません。演出の帆足先生、言うことを聞かず客席に飛び降りてしまいすみませんでした。スタッフの皆様、私たちにすばらしい舞台を与えてくださり本当にありがとうございます。そして、当日会場に足を運んでくださった観客の皆様、ありがとうございます。劇中の歌詞を引用しますが、「今が最高の時」、その言葉に嘘はなかった。私たちは全力で舞台を駆けました、心から最高であったと思えます。

十カ月の苦勞を共にした仲間の涙声にならないからだの奥底からわき起こってくる喜び、最後までやってきて本当によかったと思えた瞬間を、一生忘れることはない！そしてくじけそうな僕を支え、助けてくれた仲間たちに、心から感謝したい。

（おおいしものり・ミュージカル「絵金」・絵金役）



「今が最高の時」

—ミュージカル「絵金」から得たもの—

大石 智則

ミュージカル「絵金」の公演が終わって早三カ月、公演直後の抜け殻のような状態からも何とか脱出して、日常の生活を取り戻しつつあります。十一月の本番をめざして取り組んだ十カ月を今思い返すと、それはまるで、長い夢でも見ていたような気がします。

本番に至るまでの日々は、楽しいことばかりではありませんでした。練習でたくさんたくなって、精神的にも追いつめられて、逃げ出したくなかったことも一度や二度ではありません。しかし改めて今、あの頃のことを思い返すと、楽しかったことも苦しかったことも全てひっくり返して何物にも代えることのできない大切な思い出として残っています。

このミュージカルに参加しようとしたきっかけは団員それぞれ。自分とは言うのと、ごくごく軽い気持ちで応募しました。ところがそれがいつの間やら自分への挑戦の日々に変わるうとは、最初は思いもよりませんでした。

主役の「絵金」役に決まって最初の頃、自分が取り組んだことは絵金の人物像を模索することでした。絵金の「絵」を観、膨大な資料を読み、そして台本の行間に現れる人物像を想像することが自分の仕事でした。しかし自分も含め、参加者の多くが、

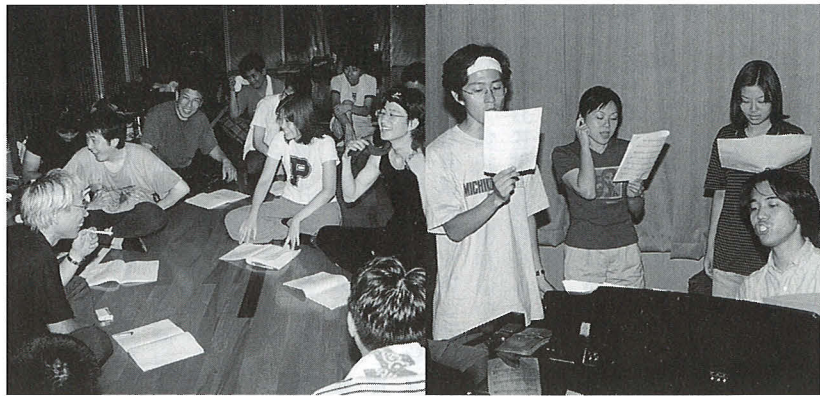
ミュージカルはおろか舞台に立った経験すらほとんどありません。不安と焦りのなかでの手探り状態です。

絵金を知らうとすればするほど、それを表現しようと練習を重ねれば重ねるほど、気持ちばかりが先行し、空回りし、焦りは増すばかり。本当に自分がこの大役をこなせるだろうか。歌に芝居に踊り、通常レッスンに加え特別レッスンも次第に増えていきます。当然あるべきことであるとは思いますが、気持ちに体がついてこないことに苛立ち、実力のなさに落ち込み、四六時中「絵金」のことが頭について離れない状態が続きました。自問自答の日々、団員みんなは励ましてくれるけれど、実際、自分自身は追い込まれていく、苦しい日々でした。

とまあ、聞くも哀れな苦しそうな辛そうなことばかり述べましたが、実際はそんなに苦しかったことばかりではなく、楽しかったことも、嬉しかったことも、この企画に参加して本当によかったと思えることもたくさんありました。バスをチャーターしてみんなで行った赤岡の「絵金祭り」、すべて手作り、熱く燃えた「よさこい祭り」、そして何よりも合宿や練習帰りにみんなで、このミュージカルについて語り合ったこと。こうして過ぎてゆく日々の中で

親睦を、信頼を深めあった仲間、幅広い世代の人間が十一月公演という一つの大きな目標に向かって、理解し合い、心を通わせ、助け合えたことこそ、「絵金」でもっとも大きな収穫ではなかったかと思えます。

公演本番を迎えるまでの十カ月の間にはさまざまなドラマがありました。特に公演直前の二カ月は、練習



世界にオンリーワン

山田裕司

〈3〉

「高知へ行ったら、絹の仕事がふえるかもしれないね」

「そうですね、せっかく日本で一番いい絹があるんですから、それを使わない手はないですね」

これは、高知へ飛び立つ前の、柳先生との会話です。

その当時の僕の仕事は、羊毛から糸を紡いで織り上げるという、いわゆるホームスパンでした。その原料である羊毛は英国からの輸入品で、どちらかと言えば北の国の仕事で、一年を通じての仕事としては、南の高知にはそぐわない物でした。かと言って今の日本の絹は、長い間の保護政策のために、すっかり国際競争力がなくなつてダメになつてしまつていて、僕には魅力のある素材とは言えなくなつていたのが実情でした（大体が、今の品種は絹の靴下用に開発されたもので、染織には最初から適していないのです）。でも、せっかく高知へ行くのだから絹の仕事はやってみたい、それも織物を始めた時からの夢だった小石丸を、日本古来の絹を、世界一すばらしい絹織物を作つて見たい！それは日本人として、また染織家としての宿命のように、ずっと思つていたことでした。

◇「小石丸の種も研究用に取り寄せ

一度、世の中から消えてしまったものを復活させるのは、新しい未知の研究と似ています。違うところは、昔の物はあまりお金がなくても出来ることです。

ともかく、情報を整理し、僕たちは一つの狙いをつけて種を手に入れ、小石丸の研究はスタートしました。養蚕は、生まれて初めてでしたが、自宅を改良したり、山に桑を取りに行つたりして、やっと約四千のまゆが出来たのは、平成六年の六月のことでした。

「高知へ行ったら、絹の仕事がふえるかもしれないんです」。そう言った服部さんの言葉は、僕にとつては長年の夢が、大げさに言つたら、これからの染織家としての運命が決まるような重大な事柄でした。僕は息を凝らして、次の彼の言葉を待ちました。

「小石丸は、あくまでも試験研究用の飼育に限られた原々種なので、もちろん一般での飼育は出来ないのですが、蚕業試験場と山田さんとの共同研究ということなら、お力になれると思います。具体的には、卵のふ化はこちらでやりますので、あとの飼育は山田さんの方でやって下さい。ただし、あくまでも試験場の委託という形になります」。そう話す服部さんの顔を見ているうちに、夢が現実になる瞬間とはこういうものなんだと強く感じました。それから二人は、実際のスケジュールの打ち合わせに入りました。実は服部さんも、数年前から小石丸に興味を持っていたようで、二人の話はいつになくはずみでした。帰りの車の中で、僕は興奮していました。

「ついにその時が来た！ それもこんなに早く。やはり高知に来たのは正しかった。小石丸だ！ 小石丸！ 小石丸！ 小石丸！」

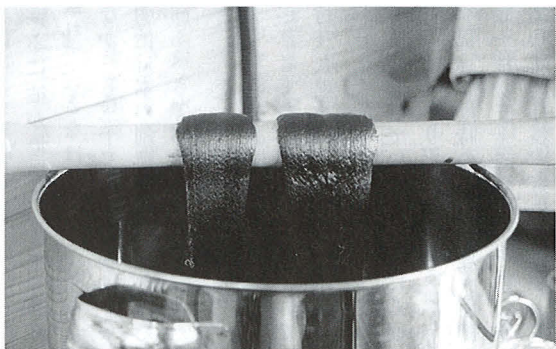
◇四千個の宝を目の前にして、僕はこれで何を作ろうか？しばらく考えました。四千のまゆからは約三六〇グラムの糸がとれるはず、だとしたら……何とか着物が一反出来そうだ！ そう思った瞬間に僕の心は決まりました。東京から大事に持って来たもう一つの宝、約八年を経過した梅樹苔の発酵染料は、美しい紫色に小石丸を染めてくれるはず。心の中には、一反の美しい着物が描かれました。



小石丸の成虫

て来て、何度も何度も、繰り返して叫んでいました。本当に高知に来て、こんなに嬉しかったことはありませんでした。

家に帰ってから、さっそく柳先生に電話をしました。「先生！ 小石丸の研究が始められそうです！」そう上気して話す僕の口ぶりに「そう、それはおめでとう。でも、今の小石丸は昔の小石丸ではないから、その所を慎重に進めなさい。小石丸なら何でもいいという訳ではないから……」。電話を置いてから改めて、「これはそう簡単なことではない」と気を引き締めました。先生のおっしゃったことに注意しているいろと調べた結果、小石丸の



海樹苔の発酵染料で糸を染めているところ

に、一本ずつ緯糸を打ち込んで織物は出来ていきます。少しずつ少しずつ布に織り上げて行くうちに、僕は身の毛が逆立つようなゾクゾクとした感覚を憶えました。

「これだ！ ずっと僕が求めていた絹は！ しかし、すごい物が出来たもんだなあ！」、はずむ心で思いました。「これだったら、縞も縞も何の柄もいらぬ、かえって邪魔なだけだ。もっとも単純な平織りだけで、十二分に美しい織物が出来る。真の美しさとは、そうしたものだ！」。世界にたった一つの、自分の求めていた織物の誕生でした。

(やまだゆうじ・染織家)



順調に成長する小石丸

◇僕は、はやる心を押さえながら手順を踏んでいきました。まゆを煮て糸を取り、撚りをかけ、ワラ灰のアクで精練すると、キラキラと美しい光沢をもつ絹糸が生まれました。その微妙な光や弾力に富んだ肌触りは、ただ物でないことを十分に予感させました。そして、その予感ほ、その後の染色・機織と進んで行くうちに、確信へと変わっていったのでした。

現状は次のようでした。一つは、長い間原々種としての保存しかされていなかったため、品質のバラつきがかなりあるということ。そして、その系統が、大きく分けると三つあるということでした。服部さんのお話によると、昔の品種というのは、現代のように品種として確定したものではない、だから長い間には最初と随分と変わってしまうこともあるとのことでした。正直なところ、「これは宝クジみたいだなあ」と、そんな感想でした。

語り継ぐ

(中)

堀内 豊

ふたたび坂本龍馬の銅像をめぐって、大野武夫さんの行跡をたどってみよう。

銅像建設の議が数人の有志によって、はじめられたのは大正十五年（一九二六）八月七日で、それから一年九カ月後の昭和三年（一九二八）五月二十七日。すなわち、坂本龍馬が「海援隊」に抛って明治維新の先駆者になったのにちなんで「海軍記念日」の当日に落成の式典が行われた。

大野さんが代筆した「ある人」である。代筆のいきさつは――。



坂本龍馬銅像建設資金募集隊の海南学校生徒と……前列右から二人目、大野武夫、山崎伊勢夫(令弟)。左端は入交好保。

事だ。

あえて昭和二年五月と区切ったのは、それなりの根拠がある。

昭和二年五月某日。大野武夫さんが起草した檄文（坂本龍馬先生銅像建設趣意書）を、県下各地の青年たちにくばった。彼らはこの秋とばかりに檄文を撒いて、精力的に募金活動を行ったからである。その頃の大野武夫さんは、野村組新聞部で頭角をあらわしていた。朝日新聞の販売紙数三千部を、一挙に八千部に伸ばすなどの才腕を振るい、その智謀と行動力には、さしもの野村茂久馬社長も舌を巻いたという。

そんな大野さんの献策を、野村社長はかぶりを振ることはまずな

かったそうで、「坂本先生銅像建設会」の会長になってもらった時も、「ああ、いいよ」と、あっさり引き受けてくれた。結果的にはこのことが、銅像建設を短時日にしとげた要因であった。と、つくづくおもう。なぜなら――。

野村茂久馬は、大野さんの進言によって野村組自動車部（現在の高知県交通バス）の担任重役に命じて、青年たちが自由自在に募金活動ができるように、全路線の「バス無料乗車券」を発行させた。

だからこそ、青年たちの活躍で建設資金が予想外に早く集まって目的を達成することができたのである。故・司馬遼太郎さんの言った、「タバコ一箱分のお金をあつめてできあがった美事な作品」が、である。

ところで、檄文のことだが、なぜか既述の「銅像建設記念 坂本龍馬先生号」のどこにも「檄文」は載せられていない。割愛したのはなぜなのか。そのわけを知ろうにも、銅像建設の関係者はほとんど物故しているの、今となつてはなんとも致し方がない。これも泡のように消えた『歴史の一滴』か。しかし、原文はあった。大野武夫さんが古くから筐底に秘してい

た「檄文」を遺族が発見して、遺著『無門塾 大野武夫集』に所収している。全文八百字の冒頭部分だけを書き写してみる。

坂本龍馬先生銅像建設趣意書 桂浜の巖頭に砕くる太平洋の荒浪が不断の鑿を揮って彫りあげたものに長宗我部があり、維新の志士があり、岩崎があり、浜口がある。大政奉還を中心とする明治日本の創業史を緝く時、吾人は今更ながら先輩の鴻業（大業）の嚇躍として雄麗なるに心躍るを覚ゆる。就中（とりわけ）坂本龍馬が維新史の重要さを思ふとき、一剣風雲を喚び虎嘯天下に鳴りし彼が豪快を偲ばざるを得ない。

惟ふに彼が世にありし、雄略（優れて大きなはかりごと）ならびなかりし三十三の生涯は、一意明治日本の創建に献げ尽されたと謂ふべきである。――後 略――

さて、大野武夫さんは「檄文」の起草者であると同時に、式典で野村茂久馬が述べた「事業報告」も作成したし、また、ある人の祝辞文も代筆している。まさに八面六臂の活躍ぶりだ。

「祝辞」は時の内閣総理大臣田中義一ほか二十二名で、そのなか

に高知新聞社長、野中楠吉がいる。わたれる午後三時半ごろ、令弟の伊勢夫（のちに山崎と改姓）をつれて桂浜へ出かけて、ふたりで式場の後片づけをして、冷や酒を呷ったという。

ところで、それと似た光景を、昭和四十三年（一九六八）の初夏から始まった「おうち（せんだん）祭」の会場（高知公園すべり山）で見かけることができた。小雨のなかで黙々と後片づけをしている大野武夫さんの姿こそ、中国の莊子の思想を体現している、と、思った。

その莊子が述べた「無用の用」は、いつてみれば、（人間や自然社会のなかで、何も役立たないと思つても、別の見方をするとけっこう役立つ用を果たしている）ということ、大野さんはさりげなく随所でみせてくれた。

ところで私は再さい大野家（無門塾）を訪ねたが、玄関を入ると土間が書齋兼応接室で、左手の壁に色紙が懸かっていた。令弟の大野龍夫画伯が描いた「糸瓜」に、武夫さんが「無用の用」と画賛している。

（つづく）
（雑文家）



鯨の口臭

山崎道生

冬は季節風が強く海は荒れるけれど、土佐では陸から吹く形になるので、桂浜や花海道から見ると風のように見える。

しかし、追い風に乗って沖合いに出るにつれ、全長十メートル程しかない釣り船に乗る者にとっては、心臓を直接つかまれるような状況へと変化して、気がつくとも海はその荒々

しい側面をむき出しにしている。頂上が白く折り返す青づいた波が船の前半分を何度も通過する光景や、ロープやワイヤー類が上げる悲鳴に、私は心底怯えてしまう。

意地と希望の綱い交ぜになった気持ちで、なおしばらくは昨夜決めた漁場を必死に目指そうとする(多くの場合、たどり着けたとしても漁に

はならない)が、やがて本能が激しく発する警告に従い、船先を北へ、高知港に向けることになる。

帰りは向かい風になるため、暫くはなお一層厳しく、緊張のため体はこわばり御叱呼もつかえっぱなしで、エンジン音に耳を澄ましながら、その快調を折るのみの数時間の航海が続く。ゆるんだボルト、切れたブイ

ベルトなどの悪夢と闘いながら、やがて静寂な岸辺に辿り着き、まずは延々と続く御叱呼を済ませるが、しばらくは口も動かない。

春は天候の変わりやすい日が多いが、たまたま北東の風がゆるんだ日に、幸運にも黒潮のへりに行けると良い漁に恵まれることがある。うね

りの中に雨垂れのようにも見える鯨の背中を見つけた次の瞬間、七つ流してある仕掛けに三つも四つも喰い付いてくる。自分で工夫した疑餌鉤にかかるとも嬉しいが、ブルーメタリックの魚体を大海から船に取り込んだ瞬間によぎる不思議な感情がある。

陸に上がっても考え続けずいられない。命あるときの鯨やマグロ類は無垢な力強さをたたえて気高く、純粹で、はかないとも言える美しさがある。奔流のように流れる底のない黒い海に棲むその魂は、大自然の魂そのもので、全身を生きた輝きで満たしているが、やがて生と死が入れ替わるにつれて、形容しがたい価値あるものから、ただの死んだ魚という物体に変わり果ててしまう。とにかくその光景は、煙草のヤニや嘘や言い訳、義務や人権とやらで覆われた虚飾のカサブタを貰いて私の胸を一撃する。

でも、ため息まじりのヘッポコ漁師の船に来てくれる鯨などそうたくさんいる訳はなく、大抵は時速七ノットの焦燥を延々と続けている。

そんな調子で春も過ぎ、梅雨の明けの頃から新米(黒マグロの幼魚)が釣れだすとともに夏が始まる。この土佐の季節感あふれる獲物と夏の訪れが嬉しくて、皆、仕掛けを新調

して土佐湾中を駆けずり回る。私も含めてその時は、ワシントン条約など出来の良い刺身のツマでしかない。もつとも仏手柑があれば何も要らないけれど。

暑くなると、あまりいい鯨は沿岸にはいなくなり、カジキの道具を曳いてみたり小さなキハダマグロを釣ったりしてみることが多い。突然、船の真横で鯨が機関車のような息をして飛び上がる、と同時にその息の生臭いのに閉口したり、イルカ付きの大きなトリヤマに騙されたりしながら、潮目や漂流物の周りを流している、青く興奮したシイラが次々とかかり猛烈に暴れるので、針はずしてやるのに難渋する。こいつは人に差し上げてあまり歓迎されないようなので、ボウズの帰路以外には唇をはらして元の海に還ることになる。去年は、数はともかく大型のシイラは全く姿を見せず、海の気まぐれであれと願った。

天気予報と相談しながらでも年間数百時間は海上にいたので、たまにはカジキがルーアーに噛み付いてくることもあり一所懸命釣り上げようとはしてみるが、針の掛かりが浅かったり糸が切れたりで上げたことはない。しかしその会話だけでしばらく嬉しい気分が残る。

二十数年前、当時流行したヒッピーやドラッグなどの無秩序礼賛に振り回されたあげく、その反動でインド洋とハワイ近海で操業する延縄漁船に小一年乗り組んだことがある。

今ならイデオロギー戦争の空しさや辛さからああいう反戦形態が発生したなどと理解できるし、他国のためにその他国の人達を殺すのはやりきれない気持ちだったろうと同情もする。同世代の学生がまったく現実感のない革命論を興奮してがなるのも聞いたりはしたが、何やら魅惑的なシタールの音色に、若い私の精液混じりの脳漿はすっかり冒されてしまっていた。その反動で"とは書いたが、私はパープルヘイズの向こう側に青い色を見ただけかも知れない。その船で数千のカジキやキハダ、メバチなどを熱帯の安逸から引きずり上げ、掛矢で叩き殺した。波のなるときの操業は流通業の一形態のよう

うで、揚げて、内臓を除き、船倉へ運び、冷凍する"の繰り返し、荒れた時が楽しく、しぶきというより波そのものを浴びながら殺戮の高揚に酔い、誰もが時折釣れる大鯨の背中にまたがり延髄を切る危険な作業をやっていた。その鯨の腹を開け、胎児が七つ八つ動いているのを見つけるとさらに興奮は高まるのだった。

相変わらず馬鹿な私だったが、一トンもあるカジキが死にながら色が変わる様子や切ないインド洋の夕暮れを、今でも夢に見ることはできる。

高知は海岸線が長く、漁村も多い。日没に追われて入港し世話になることとなり、いまはハガツオがエエ"などと話を聞くうちに、翌日大敷網を一緒に上げさせてもらうこともある。漁場は男が男でいられる場所であり、興奮して我知らずのうちに大声を出している、微かながらも残っていた野性を発見でき、この上なく爽快な気分を味わえる。そこの人々の間には明確な判断基準が存在し、経験則以外の曖昧さなどは通用しない。厳しいルールだけが豊漁や安全を保証し、勇気や自己犠牲などを迷いなく発揮でき、また評価される世界である。

大量殺人者の人権を過度に主張したり、奉仕する者の純粹さを汚したりする倒錯や卑劣な嫉妬の類は微塵も存在せず、弱者にはごく自然な優しさを持っている。しかし、やがて"多分これは旅人の感傷なんだ"と自分に言い聞かせながら、利害と裏読みで満ちた私のソドムに舵をきる。

山崎道生 代表取締役社長



頂上からの展望がよく、南方は天気さえよければ、浦戸湾がくっきりと浮かぶ。

台山竹林寺も含まれていて、ますますの気分である。いわば私の人生の縮図が見え隠れしていると言えるかも知れない。天気が良ければ一時間でも二時間でもあきることのない時

間帯である。手づくりのにぎり飯やお茶のなんとおいしいことか——周りのスキの揺れや雲の流れ、小鳥や昆虫も楽しい。眼を閉じると色いろのことが去来するのである。

標題の「ヒメシヤラ舎」というのは無い。私が勝手に名付けた五分ばかり南に下ったところの三辻山第二園地にある休憩小屋のことである。ここに道標が建ち登山道は三つに分かれている。北に登れば頂上へ、東方は「樫山、黒滝頂上線」經由で樫山峠、南西へ下れば「赤良木、三辻線」經由で県立青少年の家がある赤良木トンネル南口に至っている。

「赤良木」とはお釈迦様が涅槃に入った折の沙羅双樹（ツバキ科）の仲間の姫沙羅の別名で、この峠付近に自生していたらしい。北山越えの往環路は今はないが、その地名が往時を偲ばせてくれる。

平成七年十一月末日、物部村の三嶺で深い雪に遭い命が助かったのが不思議なくらいで、それ以来は近くの千層級の工石山、笹ヶ峰系で安全に冬風景を楽しむことに切り替えた、というらしいである。

平成八年の冬は一週間おきに雪が降るといふ天候で、新雪を楽しむ、あるいは登山初心者の冬山の訓練には好都合であったといえる。樫山峠方面登山道に残る天然林、ブナ、朴ノ木、シデ仲間、楓やシヤクナゲ等の樹木は時には樹氷をつくり、朝陽に輝く光景はウットリするばかり。

約三日おきに三辻山通いをして登山道を整備し、齢の数の六十二回を向かえた五月末、記念にヴァイオリンを背い登り、先述の休憩舎で独りコンサートを催いて楽しんだのが、この拙文の標題の由来である。

もちろん、聴き手はウグイスやメジロたちで、あるいは陽に淡赤褐色に濡れ輝くヒメシヤラも、そうだったかも知れない……。

（こんどう なおひこ・土佐史）
談話会員、十市春峰会会員

ヒメシヤラ舎のコンサート

～三辻山登山道整備余話～

近藤 直彦



土佐郡土佐山村と土佐町境に県民の森工石山がある。その北東にあるあまり知られていない標高一〇八八のみずほらしい山が三辻山である。

高知市の中心街から車で約三十キロを一時間で行けるのが手ごろというだけで、隣の工石山の陰にかくれて余り人気もないが、それだけ手付かずで自然が残されているのが魅力である。

案外に根強い登山ファンがいるのは、頂上の展望の良さと、少し南に下がった休憩舎あたりから樫山峠方面に残る天然林の深山幽谷の神秘ではないだろうか。

県道十六号線高知本山線「赤良木トンネル」南口より約一時間で登れる三辻山は、工石山陣ヶ森県立自然公園の一角のうちにあり、営林署、土佐町に管理されており、嶺北ネイ



第2園地にある休憩小屋

チャーハントの一つに数えられている。ブナ、ミツバツツジ、イヌツゲ等を切り開いた第一園地の頂上は狭く小さいが、四囲の眺望のすばらしさは好みで満足している。

頂上にある円型の地形板の文字は消えているが、二十万分之一の地図と方向磁石で四国山地名を「山座同定」勉強するには、うってつけの静かな佳いところである。

私のお気に入り入りは、遠く南国市の空港から高知市の筆山、鷲尾山や太平洋が見晴らせる、ということである。そこには私の古里南国市十市の三十二番札所禅師峰寺も三十一番五

新刊

清流を子らへ

—— 21世紀に残したい鏡川 ——

高知河川環境研究会編 A5判・並製本122頁・定価1,030円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動 日録

土佐自由民権研究会編 B5判・上製本・函入り 496頁 定価10,000円(税込み)

「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会 鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明 著 A5判・上製本・288頁 定価2,000円(本体1,942円)



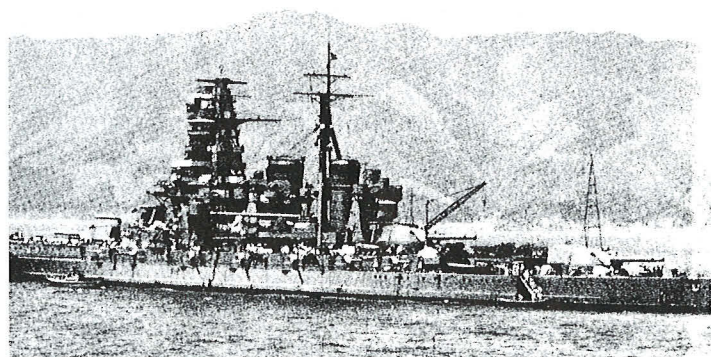
久武 盛真

大正十一年十一月に、前年十一月二十五日に摂政にご就任遊ばされた迪宮裕仁親王殿下がお召艦霧島以下の艦隊を従えて土佐へ行啓なさいましたのは、土讃線が未開通の為だったでしょう。その時二の丸の山内容堂の銅像前に松をお手植えなさいました。祖母の店にたち寄った四人の水兵は葉書を認めながら、餅やおでんを誰が幾つ食ったか判らぬ素早さでパクパク食いました。海軍はロクに食べさせてなかったのでしょうか。祖母がキチンと代金を貰ったかどうか怪しいもんです。

中の一人が私より十歳年上の叔母の糸さんを「軍艦見たるか」と誘いました。糸叔母さんは十人並みのポチャポチャの娘盛りでしたから、女性に飢えている水兵さんには頗るベツピンに見えたでしょう。

後年考えるとたち寄った四人の水兵の本命は多分遊廓だったと思えます。敵陣突破の腹ごしらえ中にも、家郷へ便りを忘れぬとは何と殊勝な水兵さん達でしょうか。

兄が神主兼校長では近所の若い衆も遠慮するのか、糸叔母さんには気



戦艦 霧島

安く声をかけた者はありません。無論糸さんは簡単に誘いに乗るようなすれっ枯らしてはありませんが、土佐へ再々軍艦が来る筈はないから尻込みしては勿体ないと思つたでしょう。だが「礼記」にも男女七歳にして席を同じゅうせずという程に男女関係の喧しい時代ですから、嫁入り前の娘が見ず知らずの四人連れにノコノコついて行くのは甚だもって不見識です。この時頭のよい叔母が「男の子を二人連れていつてはいけ

ませんか」と尋ねたお陰で兄と私は思わぬ余慶を蒙りました。やけに頑丈でペンキ臭いランチは波しぶきをあげて沖へ沖へと進みました。聳える軍艦の舷側の長いタラップを強い横風を受けながら一人ずつ一列で登りました。甲板はいつぱいの人ばかりです。水兵の先導で暗い艦内をお化け屋敷の要領で後戻りせず元へ通り返り抜けてお終いという段取りでした。

声を掛けてくれた水兵が電柱を寝かしたような大砲の説明をしてくれました。そこへ見知らぬ水兵が四、五人現れて説明する水兵の肩を力任せに叩きました。叩かれた水兵は得意そうでした。彼は初っ端から色白のポチャポチャに野心はなく、ベツピンの一人も連れてきて戦友の鼻を明かせば満足だったのでしよう。ナフタリンみたいな男の子が二人付いて来ても大して苦にはしませんでした。

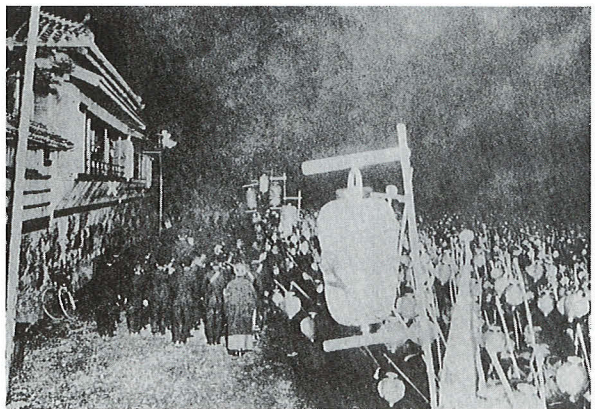
翌日九反田の母の実家では全員集合で先祖祭りが挙行されました。大人の他に従兄弟が男女合わせて十一人集まりました。子供十一人が互いに罵りあうとさしも広い伯父の家も隅から隅まで騒々しくなりました。

東京から戻った最年長の従姉の勝子は我が家の糸さんと同年で十七歳です。勝子は直径三十七センチ程のハ

ト型の薄板に三本の足の付いた狐狗狸さんを取り出しました。その板に手を乗せると念力で動いて足の一本が怪しげな図形を描きます。その図形で運勢が判るといので大人も加わりました。

誰がやっても不思議な動きをするのに、私がやると何故かビクともしません。何度やっても同じです。みんな出来るのに自分だけ出来ないのは耐え難く情け無いものです。私はひどい劣等感に陥りました。勝子は気を遣って明るい声で「では催眠術にしましょう」と方針を変えました。妙な声で「さあ目を閉じなさい。静かに息を吸って、肩の力を抜くのよ、息を吐いて、今度は吸って、静かに吐いて、そうらだんだん喉が重くなる」と型の如く暗示をかきました。けれども勝子がそばへ来ると良い匂いがするだけで、喉は重くも軽くもなりません。

にも泣き出した気持で居ると「そうら揺れてきた揺れてきた。だんだん体が熱くなる」と言うではありませんか。客観的にはどうやら動いていたらしいのです。「喉が渇くでしょう。サイダーを上げましょう。さあ、コップを持って」と言われる通り一口飲むとそれは唯の水でした。「おいしいでしょう」と念を押されたり、「いくら飲んでもいいのよ」と気前のよい事を言われて挨拶に困りました。唯の水をおいしいとも言えず曖昧に「うん」と言うと言催眠術は大成功になりました。従兄弟達がかかるがわる私の飲み残しを飲んだが勝子の顔を立てて「何だ唯の水じゃないか」とは誰一人言いませんでした。勝子は私に「おいしかったですの」ともう一度念を押ししました。「うん」と消極的な嘘を言うかたの」とも一度念を押ししました。面目を施した勝子は笑顔で「それは東宮様を拜みに連れて行って上げましょう」と、この家の次男の彦次と下田から来た鴻太郎と私と、年下の男の子ばかり三人お供に連れて花電車のある街へ繰り出しました。



奉迎の提灯行列(水哉閣前)(寺田正写真文庫・高知市民図書館蔵)

幾重にも並んだ民草の最敬礼が、渚で波が遠くから順繰りに碎ける様にこっちへ打ち寄せて来ました。東宮様はどんなお顔でどんな身なりだろうと目を皿にしていると、隣の勝子が矢庭に力づくで私の頭をねじ伏せました。された通りに俯いて上目遣いに見ている前を肅々と行列は通り過ぎて、残念ながら東宮様のご様子の観察は叶いませんでした。

行きも戻りも徒歩でしたが、匂いのよいアイドルに連れてきて貰った男の子三人は文句を言いませんでした。



柵形の電車道に造られた奉迎門(寺田正写真文庫・高知市民図書館蔵)

広い並木道の両側に詰めかけた見物人の前で、頸紐に抜剣の巡査が並木の間に張り渡したロープをかい潜る不届き者に三角目で喚いていました。暫くして遠くに行列が現れると

(ひさたけせいま・泉文芸主宰)

土佐考古通信 (3)

山本 哲也

旧石器の狩人たち

今から約一万二千年以上の昔、私達の祖先は水辺に集う草食動物や大型の哺乳動物等を捕りながら生活を営んでいました。日本列島がまだ大陸と陸続きで、瀬戸内海が大きな湖であった頃です。当時の海岸線は約一〇〇メートル程沖合にありまし

た。
この頃の時代を、日本歴史のなかで「旧石器時代」と呼んでいます。まだ土器を使用した生活様式が行われていなかったため、これまでは先土器時代とか無土器文化の時代とも呼ばれていました。昭和二十四年に群馬県岩宿遺跡で旧石器文化の存在が発見されるまで、縄文時代をはるかにさかのぼる文化の存在は、時折論議はされたものの空想の産物であるとみなされてきました。岩宿遺跡の調査以降、各地で発見例が相次ぎ

器文化の存在が明らかになってきています。

この時代には、土器作りはまだ行われてはいませんでした。世界最古の土器が日本の縄文土器であるのかどうか、現在でも議論が重ねられており、土器の誕生そのものにもまだまだ謎が横たわっています。粘土を塗った籠が偶然たき火や炉にかかり焼かれて土器を知ったという説もあります。いずれにしても、土器誕生以前には獣の毛皮や木製容器・植物の繊維などで編んだ籠などが日常使用されたのではないかと想像されています。

ところで、この時期には名称のごとく多種多様な石器が製作されました。まだ石鏃(石の矢尻)は発明されてはおりませんが、石製の槍先・槌のみ・刃・ナイフ類などが製作されました。これらの石器類は、原石から規則

正しく丹念に打ち割られて作られており、高度な技術文化が存在していたことが理解されます。昔の人は原始人なので、現代人に比べて劣っているなどという考え方は誤りで、当時の社会背景や文化環境・精神文化などの視点を考えることを忘れていきます。試しに、石器づくりに挑戦してみても、頭程の大きさの原石から、あの見事なまでに完成された石器を作り出すことがいかに困難なことであるか、おそらく途方にくれることだと思えます。

世界の旧石器文化に比較して、数十万年前に遡る前期旧石器時代の遺跡は国内でもまだ数遺跡しか発見されていません。旧石器時代の遺跡の多くは約二・三万年後の後期旧石器



岩陰遺跡 南国市岡豊町

時代に該当します。高知県下で確認されている遺跡も、後期旧石器時代以降に属します。

県下では、宿毛市・中村市・大月町・大正町・櫛原町などの県西南部を中心として遺跡が確認されています。また県中央部から以東ではこれまで高知市・安芸市で断片的な資料が採集されていただけでした。

ところが平成八年度の四国横断自動車道建設に伴う南国市岡豊町小蓮・奥谷南遺跡の調査において、旧石器時代の岩陰遺跡が二カ所も発見され本県の旧石器時代研究に著しい成果をもたらすことになりました。

この遺跡は、平成元・二年度における県下遺跡詳細分布調査において縄文時代遺物散布地として確認されていたもので、当初から旧石器時代の遺跡としては想定されていませんでした。谷奥の巨石のもと、宅地の敷地下に遺跡は埋もれていました。

なによりも重要なことは、後期旧石器時代後半から終末期(細石器文化期)・縄文草創期の土器を含む包含層が岩陰に層位的に堆積していたことで、多量の石器・石器剥片が出土しました。太平洋岸における希少な旧石器時代岩陰遺跡として全国的に注目されています。

（やまもとてつや・高知県埋蔵文化財センター）



第12回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

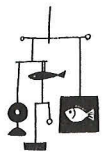
高知を撮る

浜のわらべ 近藤輝代彦

インターネットが流行である。戦後しばらくは、住所欄に電話番号が載っているだけで社会的に信用されたものだが、昨今はEメールのアドレスがないと時代遅れと見なされるらしい。パソコンを買ってインターネットにつなぐことは金さえ出せば誰でもできる。問題はそれからである。随分簡単に買ったとは言え、素人にとってパソコンはなかなかの代物である。

変換

風俗歳時記



ある女性アナウンサーは一念発起して特訓を受け、自宅で練習を始めたが初日にスイッチを切るのに三時間かかった。書店で見た「サルでも判るパソコン」にも求める答えはでていない。かくて「これは誰にも頼れないぞ」と覚悟を決めたという(NHKラジオ深夜便・冬号)。専門家にとっては常識以前のこと素人にとっては一大事なのである。

機械の使い方が判っても、パソコンには思わぬ落とし穴がある。私が初めてワープロに向かった時、「はいりこ

できた」と打って漢字変換したら「ハイ離婚できた」と出てきてびっくりした。友人には「君を見て変換したんだろ」と言われたが、ワープロは人を見分けるほど賢くはない。困ったことに、日本語には同音異語がやたらと多い。同じカイトウでも、回答、解答、会頭、解冻、怪盗、快刀、解糖、など賑やかである。難しい漢字だと、どれが正しいのかわ信がなくなり、変換しこれでもいいかと辞書を引く、はめに陥る。人を見分けることができなくても、せめて文脈を見て変換するようにしてほしいものである。

漢字の変換の問題は所詮使う人の漢字の素養に帰着するとも言えるが、素養が通用しないのが、パソコンのマニユアルである。「業界」独特の用語と表現法、これらを理解するにはかなりの忍耐と気力を要する。使用説明書の解説書まで出ているというから驚きである。どうやら、漢字変換以上に難しいのは、「業界言葉」を下素人の言葉に変換することであるらしい。(路)



鏡川大橋の北の桁下は、市内各所から集めた放置自転車の仮置場として利用されている。南の新田町側の桁下は、地域のゲートボールのコートとして整備されている。使用マナーが良いためか、チリやゴミがない。
驚いたのはこの橋脚に描かれている絵、落書きにしては出来栄が良すぎる。時間と労を費やしお金もかけていると思うが、その制作意図を聞いてみたい気がする。もちろんこうした事を奨励するつもりはないが……。

風伯

〈風伯〉雑考

本欄の標題「風伯」は「風神」の意である。おそらく「巷の風が運んでくる噂話」「風聞」というようなものを意図した題号であろう。このコラムにかかわって二年余いつか「風の神様」の身許調べをしてみたかと思いついてきた。

昨夏、書店から届いた『道教の神々』の目次に、「雨師と風伯」の一項を見つけたときには、してやったりと、内心ほくそ笑んだ。このあたりがクサイぞ、という思惑が的中したからである。

同書によると、風神はもとも箕星という星である。また、飛廉という神鳥でもあって、よく風をおこすことができる。身体

は鹿に、頭は爵とよぶ中国古代の盃の形に、尻尾は豹ぐらゐの大きさの蛇に、それぞれ似ていて、角がはえていて、という。

これに力を得て、今度は『道教』の大辞典に当たってみると、

「箕星とは……射手座のγ星の四つの星にあたる」、「明、清以後では『風伯方天君』とも呼ばれ、白髪の老人として、左手に輪を持ち、右手に扇を持ってあおぐ姿となつて、風雨雲山川壇の神として祀られていた」、「今でも福建、広東、台湾など沿海地方の漁民は毎年四月二十二日を風神の誕生日として、風神廟で航海の安全を祈り、風神を祀っている」などとある。

本欄の名付親は、高名な民俗学者であると聞く。「君もやってみてまで辿りついたかね……。」と、微笑まれることである。(完)

市民フロアのご利用を 展示や会議に最適!

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、スポーツライト完備

所在地 高知市はりまや町一―五―一
デンテツターミナルビル5F

お申し込み
(高知市文化振興事業団)
電話 73-4365

好評につき二刷発売中!

土佐弁 土佐日記

土居重俊監修 B6判・130頁・上製本
高知市文化振興事業団 編 定価 1,300円

紀貫之の名著『土佐日記』を、とさことばでつづるとどうなるか? 古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

好評につき二刷発売中!

高知の森林

高知県緑の環境会議 森林研究会 編
B5変型・228頁 定価 2,500円

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、まだ残されている貴重な自然や植生のほか、森林と人々とのかわりの歴史や、現地への道のり等も紹介。

賛助会員募集中!!

年会費 2,000円

特典 ① 機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)
③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)

〔※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効〕

お申し込み ①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

◇シャル・ウィ・ダンス? という映画がありました。謹厳実直な中年男が、ダンスにのめり込んでいくという、おかしくも哀しい話でした。職人芸のような作品に圧倒されたのですが、変人として描かれたその主人公は、四十二歳の男でした。もし、六十歳の男がミュージカル出演へ挑戦したとしたら、それはもう気が確かか、と言われてしまうでしょう。ところが一人、年寄りの冷や水もよいところの人間が実際にいたのです。

去る十一月三、四日、県芸術祭参加事業として、高知市の文化ホールで公開されたミュージカル「絵金」の舞台に、八十六名の若者達に混じって立っていた、白髪頭の私がその男でした。

◇市民参加の創作ミュージカルとして、幕末土佐の絵師へ金蔵を主人公に、休憩なしの二時間二十分の舞台が展開したのですか、フィナーレの時には、思わず涙ぐんでおりました。私の役はその他大勢で、台詞も一つだけという内容でしたが、基礎訓練の教室に入った時から数える、十カ月のレッスンでした。出番の多少に係わらず感無量なものでありました。

◇なんとか幕が降り、ホッとしてから十日たらずの今、舞台で受けた

ミュージカル「絵金」の 舞台に参加して (1)

三浦 良一

熱気の故か、まだボンヤリしていません。一体なぜ始めたのか、練習中に感じたこと、考えたことは、終わってからの思いは? といった編集部からの問いに、どれだけ確かに答えられるか、心もとない限りですが、以下、思い付くままの見聞と雑感です。変な年寄りが呟くモノローグとして聞いてやって下さい。

宿など)、九月から通し稽古、十月は連日のレッスン、十一月三、四日公演(一五〇〇席、三ステージ、最終出演者八六名)といったところが、大まかな流れだったと思います。

スタッフの顔ぶれ、キャストのプロフィル、細かな進行状況など、確かな事には触れませんが、それは事業と呼んで遜色のない大きな営みでした。「舞台創りによる文化運動」という目的が、どれだけ実ったかは別にして、それぞれが流した汗の量は、想像以上のものだったと思います。

◇参加の動機ですか、生来、芸ごととは好きでした。学芸会に始まって、青年団の演芸大会、学園祭、職場では文化闘争という名で舞台作りや観劇に親しんで来たものでした。

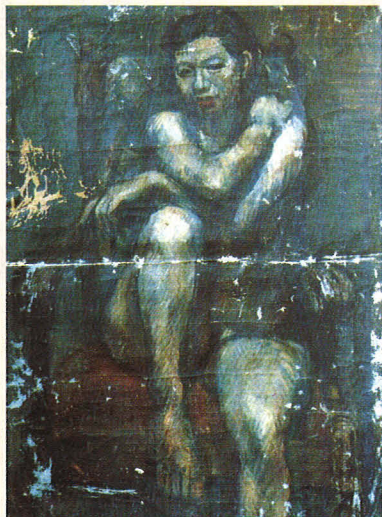
とはいえ、所詮、素人の趣味レベルから出るものでは無かったのですが、妙な事からTVドラマの製作に關係する機会があり、作劇というものに、主体的な関心を持ったのが、応募したきっかけの一つでした。演技のイロハ、ドラマ作りの基礎に感じてみたいという欲求に動かされたという訳です。それと、以前から、権威の欺瞞を突き、庶民の中で生きようとした「絵金」という人に、引かれるものを覚えていたので、その人間像をより深く掴めるのではないかと、という思いもありました。加えて、という思いもありました。加えていえば、ともすれば天下泰平で、ボケてしまいがちな退職老人にはなりたいくない、という挑戦の気持ちもかさなり、ついつい六十男の酔狂な申し込みになっていたと言う次第です。

◇養成レッスンの第一回目は、県民体育館でした。主催者の文化振興事業団も驚く多数の参加者だったとか、ミュージカルが市民権を得たという時代の証しでもあったのでしょうか。会場へ入ると、ミュージカルはダンスが主体という雰囲気、当方はバレエとオペラの違い、オペレッタとミュージカルの区別も定かでないという程度の身、早速ダンスシューズでストレッチと称する準備体操に入っている若者達を眺め、圧倒されました。見回してみると年配者は数える程、心細い限りでした。「六十代の人もいますから……。」という口でしたが、結局、十カ月の後まで残った六十代の者は私だけでした。

その日はイメージ体操という動きをしたり、ツイステップに挑んだり、縄のない縄跳び競技などが行われたのですが、何十年ぶりかで経験する集団での運動に、うろろうろし、照れ笑いはかりしていました。(つづく)

戦没画学生「祈りの絵」高知展

主に昭和13年～20年に東京美術学校（現東京芸大）に在籍し出征した約20名の戦没画学生の遺作・遺品等を公開、展示する。1名の画学生につき約5点を予定。計100点前後。



「霜子」 中村萬平

1997年3月26日(水)～3月30日(日)

AM 9:00～PM 6:30・最終日はPM 4:00終了

高知市立自由民権記念館・自由ギャラリー(無料)

★関連企画講演『戦没画学生慰霊美術館「無言館」のこと』

日程 ● 3月29日(土)午後3時～4時30分(民権ホール・無料)
定員132人(要電話申込み)

講師 ● 窪島 誠一郎氏
(戦没画学生慰霊美術館「無言館」建設準備委員会代表
信濃デッサン館館主)

主催 ● 戦没画学生「祈りの絵」高知展実行委員会

● 財高知市文化振興事業団

共催 ● 信濃デッサン館

後援 高知市・高知市教育委員会・高知市立自由民権記念館・高知新聞社
・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・NHK高知放送局・高知
さんさんテレビ・高知ケーブルテレビ・エフエム高知・朝日新聞社
高知支局・毎日新聞社高知支局・読売新聞社高知支局

連絡先 財高知市文化振興事業団 ☎0888-73-4365

透明な歌声と典雅な古楽器リュートとヴィオラ・ダ・ガンバ 時を越えて響き合う静かな歓びの時間

ルネッサンスの肖像

日本全国のコンサートで絶賛を浴びている波多野睦美とつのだたかしのデュオに、CDレコーディングのため一時帰国しているベルギー在住の上村かをりを加えての特別プログラムです。



上村かをり

波多野睦美 ソプラノ
つのだたかし リュート
上村かをり ヴィオラ・ダ・ガンバ

program

去れ夜毎の惱みよ	J. グラウンド	(17c イギリス)
ある日進ずるシルヴィーは	P. ゲドロン	(17c フランス)
悲しみよ、表に出ないで	J. ダニエル	(17c イギリス)
レセルカーダ	D. オルティス	(16c スペイン)
カンツォーナ	G. フレスコバルディ	(17c イタリア)
	他	

1997年4月15日(火) 午後7時開演(6時30分開場)

高知市立自由民権記念館 アトリウム

入場料：前売り2,500円(高校生以下1,500円)*当日は300円増

チケット取扱所：高新ブレイガイド/チケットセゾン/チケットぴあ

県立美術館ミュージアムショップ/高知市文化振興事業団

お問い合わせ・チケット予約/高知市文化振興事業団 ☎0888-73-4365

主催：(財)高知市文化振興事業団 共催：高知市立自由民権記念館 協力：高知古典音楽を聴く会



波多野睦美・つのだたかし